



◆太田氏 (常陸平氏東條氏流東條氏裔)
家紋: 梨 (水戸9代藩主徳川斉昭より下賜(オリジナルは桔梗か))

太田氏は、常陸平氏東條氏族のうち東條太田(茨城県稲敷市下太田・太田)を領した一流が織豊後期、豊臣秀吉方蘆名盛重との合戦で滅んだとき、男(むす)の助衛門が生き残り太田に改姓して初代となる『太田氏系図』。
初代助衛門の男、一有は寛永期に水戸初代藩主徳川頼房(威公)に細工人として出仕、2代藩主徳川光圀(義公)に重用されて太田氏の興隆を果たし、併せて常陸平氏東條氏再興の礎を築く。裔は幕末まで同職を世襲し、維新を経て現在へ至る。

桓武平氏葛原親王流は二流に分かれ、一つは長男高棟王が父の臣籍降下と同年天長2年(825)に平姓を賜わり、裔が京の中級貴族となって高倉天皇母滋子(後白河女御)、平清盛妻時子へつながる。

二つ目は、次男高見王の男高望が寛平2年(890)5月12日に平姓を賜わり、昌泰元年(898)4月上総介に任じられて下向し、任期満了後も留任して裔が坂東各地で繁栄した系統で、常陸平氏はこれに属す。平高望は各地の豪族と結び、上総、下総、常陸に広大な私有田を開墾、長男國香は常陸大掾源護との姻戚関係から真壁郡石田(筑西市東石田)へ本拠を移し、常陸大掾、鎮守府将軍となって筑波郡、真壁郡、新治郡一帯を統治した。平國香の長男貞盛は常陸大掾職を継ぐとともに官職を得て京にあったが、源護を含む常陸平氏一族の内訌で父國香を従兄弟の平将門に殺され藤原秀郷の支援を得てこの「平将門の乱」を鎮定する。その功により昇進して近畿に所領を獲得、裔が繁栄して平氏の主流伊勢平氏となり平清盛を頂点とする平家へと発展する。

一方、平貞盛の弟繁盛は常陸國に留まり、貞盛は繁盛の男維幹を養子として常陸國內の全所領と官職を譲渡した。維幹は筑波郡水守(つくば市水守)と多気(つくば市北条)に館を持ち経営に励んで常陸平氏祖となる。爾来、常陸平氏は維幹の「幹」を通字とする。維幹から4代後の直幹は平安後期、その男4兄弟の3子へ常陸國の所領を割譲した。先ず4男が仁平元年(1151)以前に下妻を領し下妻四郎弘幹と称す。5男は永暦元年(1160)頃、信太郎(文祿4年(1595)から河内郡)東條五郎(小野(稲敷市小野)・朝夷(稲敷市下根本)・高田(稲敷市高田)・乗浜(稲敷市神宮寺・阿波)・稲敷(龍ヶ崎市八代町)を領し東條五郎左衛門尉忠幹と称して東條太田城を築き東條氏祖となる。6男は承安2年(1172)に真壁を領し真壁六郎長幹と称す。最後に長男は安元2年(1176)、父母を殺害(『吉記』6月18日条(龍ヶ崎市史 中世編』60頁))して常陸大掾職と多気の領地を相続し多気太郎義幹と称す。多気義幹は鎌倉初期の建久4年(1193)に小田氏祖八田知家に謀られ源頼朝より同年6月12日に放逐されるも相模國へ移って芹澤氏を興し、裔が常陸國へ戻り現在へ至る。下妻弘幹は同年12月13日、頼朝の命により八田知家に斬られ滅亡する。東條氏は東條太田城を本拠とし、2代兵部丞光幹、3代孫五郎清幹、4代三郎致幹までは世次明確なるも、諸家が分立し5代目以降は嫡流が不明となる。真壁氏は各時代の勝ち組に付き現在へ至る。治承・文治の源平争乱では坂東諸平氏の多くが頼朝に与する中において東條氏は非協力的な態度を貫き、寿永2年(1183)の志太義廣の反乱では義廣に与して一時的とはいえ敵対したため鎌倉幕府から不利遇され、佐竹氏・小田氏・北條氏らから圧迫された東條氏は、領地へ東條高田氏・東條大沼氏・東條社氏など複数の分家を配置して嫡流を不明確にし、幕府御家人の國井氏・中郡氏・那珂氏らと姻戚関係を構築し、加えて康元元年(1256)8月以前に東條の地を熊野新宮速玉社へ寄進・立荘する等の対策を講じて所領確保に努め鎌倉期を乗り切る。

南北朝内乱初期の東條荘は全盛期を迎えた東條氏の統治が確立していたが延元元年(北朝建武3年(1336)北朝方足利尊氏が高田郷を佐佐木定宗に宛行。高田郷を没収された東條氏は南朝へ靡き、備えに神宮寺城を築く。延元2年(北朝建武4年(1337)常陸南朝勢は東條太田城に挙兵。延元3年(北朝暦應元年(1338)9月、南朝の准后北畠親房は勢力立直しのため約500艘の大船団で伊勢から陸奥へ向かうも遠州灘で台風により船団は四散。親房ら数百は東條浦へ漂着し東條氏の案内で神宮寺城へ依った。同年10月5日、北朝方の佐竹義篤が大掾高幹、鹿島幹寛、幹重父子、畑田時幹、宮崎幹頭ら(全て常陸平氏)を糾合して霞ヶ浦を渡り来攻。神宮寺城は程なく落城。親房主従は阿波崎城へ移り、救援の小田治久により小田城へ入る。興國2年(北朝暦應4年(1341)年9月17日、北朝方屋代彦七信経・別府幸實らが信太庄佐倉楯(江戸崎町)・河内郡馴馬楯(龍ヶ崎市)・東條太田城・龜谷城(江戸崎町)を攻略。同年10月5日、東條氏は余力を残して北朝方に降伏。南北朝内乱で衰弱するも一定の勢力を保った東條氏は文明13年(1481)5月5日の常陸小鶴原の合戦では小田成治に従い、大掾氏、後北條氏、真壁氏、笠間氏らと共に水戸の江戸氏を攻める。

一方、嘉慶元年(1387)、美濃國守護土岐氏庶流の原刑部少輔秀成が関東管領山内上杉憲方の被官として江戸崎へ移住し信太庄惣政所を開設。土岐原氏を名乗り江戸崎土岐始祖となる。土岐原氏は江戸崎城を築いて本拠とし、美濃土岐氏本家から入った治頼が本家を譲られ、その男治英の代から土岐氏に復したとされる。土岐氏は勢力強化策として東條氏と姻戚関係を結んで天文22年(1553)までに麾下へ組み込み、東條太田城は土岐氏の支城となる。しかし小田氏との抗争や内紛で疲弊した土岐氏は、佐竹氏の南下政策に対抗するため後北條氏と同盟したことから豊臣秀吉による小田原征伐に伴う常陸の合戦で、天正18年(1590)5月20日江戸崎城は秀吉方神野覚助に攻められ開城。城主治綱は家臣と共に帰農、男で父と籠城していた最後の東條太田城主土岐頼英は塾居してそれぞれ命脈を保つ。兵士の大半が江戸崎城へ詰めており、僅かな守備隊が残る東條太田城は同日、秀吉方蘆名盛重に攻められ落城。東條氏一族は各地へ敗走。東條弾正の長男助衛門は太田に改姓して江戸に潜伏。

東條改太田氏については『常陸誌料平氏譜 一』(宮本茶村(国立公文書館蔵))に「天正16年(1588)3月付『誓書』を根拠として東條兵庫幹要があり、『太田九藏系図』を根拠として裔が太田へ改姓した」とある。『太田氏系図』に於いて、東條兵庫幹要の男弾正某が「天正年中蘆名盛重と戦って一家滅亡し、彈正某の男助衛門が太田へ改姓して江戸に住した」としている。

天正、文禄と、江戸に潜む太田氏初代助衛門に慶長11年(1606)、一有が誕生する。一有は、寛永期(1624~1644)水戸初代藩主徳川頼房に細工人太田九藏家として出仕(『太田氏系図』および『寛文規式帳(水府御規式分限)(寛文9年(1669)正月)』(『水城金鑑』(小宮山楓軒編纂)所収彰考館文庫蔵))。

寛文元年(1661)光圀が水戸2代藩主となり、光圀は寛文5年(1665)、明の遺臣朱舜水を招聘し父頼房が中屋敷として造営した江戸小石川藩邸を上屋敷として整備。庭園の潤色に朱舜水の意見を採用。『後樂園』は朱舜水の命名。『後楽園記事』(元文元年(1736)源信興著)によれば、唐門扁額の題字『後樂園』は朱舜水の筆にして太田九藏(一有)が彫刻せるものとされる。一有はさらに光圀20歳頃と50歳の二つの假面を彫り(常陸太田市久昌寺に現存)、それを肖像の原型として道服姿の義公塑像を制作した。光圀50歳の假面は延寶5年(1677)に制作し、72歳の一有はこれを機に致仕して長男歳勝へ家督を譲る。

元禄4年(1691)、光圀は西山荘への隠棲にあたり、一有を近臣23名の一人として帯同し西山荘近傍の白坂に屋敷を与える(『常磐物語』明治30年(1897)栗田寛『水戸義公傳』明治44年(1911)佐藤進)。元禄6年(1693)、88歳の一有は光圀に命ぜられ桂村高久(茨城県東茨城郡城里町高久)の鹿嶋神社に祀られ傷みが激しかった悪路王の頭形を修理している。一有は元禄10年(1697)白坂で没。享年91歳。その妻も元禄12年(1699)白坂で没。元禄13年(1700)に73歳の光圀が西山荘で没すると、長男歳勝は水戸城下の天王町へ転居する。

一方、一有の次男常言は祖父の旧姓である東條へ復して分家、常陸平氏東條氏が再興された。東條常言は延寶7年(1679)水戸藩へ出仕し光圀の命で菅原道真木像を制作、光圀は常陸國那珂湊天満宮へ元禄8年(1695)春に御神体として奉納した。常言の男常信は享保14年(1729)「江戸矢倉奉行」へ進み、その長男常房は鎌倉英勝寺へ生涯に都合3回出張した。しかし継嗣が絶え、東條氏は寛政5年(1793)に絶家となる。

元禄8年(1695)から同14年(1701)の間、太田氏3代目の歳勝は光圀の史書(正徳5年(1715)から『大日本史』と称す)の編纂にあたり佐々介三郎らと共に安積覺兵衛、中村堂溪らと複数の『往復書案』(8通が現存(京都大学文学部蔵)を交わしている。西山荘は、光圀没後間もない寶永2年(1705)、水戸3代藩主徳川綱條から藩財政の再建を託された松波勘十郎により一部は江戸へ移築され、御殿は取り壊されて一旦は消滅する。西山荘に安置されていた太田九藏一有作の義公塑像は享保元年(1716)の光圀17回忌にあたって綱條が西山の地に建てた恵日庵(えにちあん)へ遷され、以後100年間、代々の久昌寺住持により守られた文化14年(1817)恵日庵とともに焼失した。西山荘は、徳川齋昭の兄である水戸8代藩主齋脩が文政2年(1819)に規模を縮小して再建し現在へ至る。太田氏6代目歳永については、文化6年(1809)付の寒水石(大理石)の扱いに関する太田九藏書状および寛書が茨城大学図書館に現存する。文政12年(1829)に水戸9代藩主となった徳川齋昭(烈公)が下士を取り立て藩政改革を強行して保守門閥派との軋轢が強まる中、太田九藏藏吉は齋昭から家紋と大小を下賜される。齋昭はまた、天保5年(1834)に久昌寺所蔵の義公假面に基づいて道服姿の義公塑像を再造するよう細工人に命じ、それが西山荘に現存する。

天保7年(1836)9月10日、齋昭は経費節減のため江戸詰の藩士を水戸へ移すべく、陸田となっていた嘗ての新屋敷を武家屋敷地として再開発した。太田九藏歳松夫妻、男の藏吉、そしてその姉は、天王町から新屋敷花小路(新莊3丁目)へ転居する。

萬延元年(1860)8月に齋昭が没すると保守門閥派(諸生派)が復活・台頭し、水戸藩土のきとして史上最大の悲劇となる天狗争乱へ突き進む。文久元年(1861)8月、数軒先の新屋敷楓小路(新莊2丁目)の三宅八郎家から五女のきむが太田藏吉へ入籍し、天狗争乱の最中元治元年(1864)8月に捨吉が誕生するが、父の藏吉は『慶應元年(1865)10月25日的一件』(『南梁年録』巻87(小宮山南梁)(国立国会図書館蔵))に連座する。口碑は、「連座は妬みによる讒言」とする。慶應元年10月25日から明治中期までの生活はきむが支え、太田氏を再興したのは捨吉だった。慶應3年(1867)、父藏吉が若くして没したため弱冠4歳で家督を継いだ捨吉は母きむの庇護の下、勉学に励み、長じて水戸の警察官となる。きむが大正7年(1918)、捨吉が大正8年(1919)に相継いで没すると、その妻いゝ、長男温、4男茂(長女・次男・3男は天逝)は横濱へ転居する。

■ 略系図

